■テーマ展

比爪（ひづめ）ーもう一つの平泉ー

会期：平成26年3月15日(土)～5月11日(日)　　会場：特別展示室

奥州藤原氏の中心の権力拠点は「平泉」です。しかし、奥州藤原氏の支配形態は、「平泉」一極集中の権力構造ではなく、第二の拠点「比爪」の存在を注目すべきです。「比爪」は岩手県紫波郡紫波町南日詰付近を中心とする地域です。「比爪」は「平泉」に匹敵する権力中枢なのか、その勢力範囲はどこまで広がるのか、また「比爪」と「平泉」はどのような関係か、考古学資料を中心にその実像を紹介します。

1　奥州藤原氏の勢力範囲と内部構造

奥州藤原氏は、12世紀代、東北地方に勢力を有していた豪族的武士団です。比爪初代の「藤原清綱（ふじわらきよつな）」は平泉初代の「清衡」の息子で、二代の「基衡」の弟です。「清綱」も姓は「藤原」であり、「比爪」も「奥州藤原氏」と位置付けることが妥当です。奥州藤原氏の勢力範囲は、出羽（秋田・山形県域）全域と福島盆地以北の陸奥（岩手・宮城・青森県域）であって、東北地方全体ではありません。

奥州藤原氏の元来の本拠地は陸奥国奥六郡ですが、平泉は奥六郡よりも南側に位置し、その志向は勢力圏南部、さらには日本の中心の京都へ向いていたと考えられます。一方、比爪は、奥六郡の北半部に位置し、その志向は奥六郡北半部から、糠部、外ヶ浜などの勢力圏北部に向いていたと考えられます。

2　平泉　ー奥州藤原氏第一の拠点ー

平泉は、院政期京都の有力者の居館構造を他地域に先んじて取り入れた画期的な構造の都市でした。この居館構造は、以下の三機能からなる複合施設です。

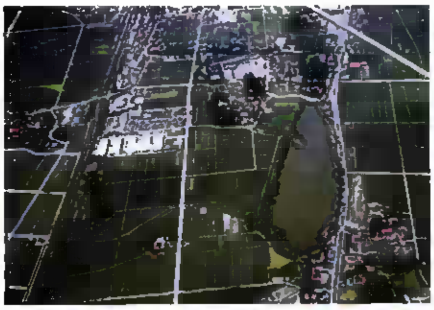
1 儀礼・政務の施設の「館」
2 居住用施設の「御所」
3 宗教施設の「寺院」

都市平泉の形態は、初代清衡から、三代秀衡におよぶ、各代の「居館」が重複、連結したものといえます。その都市の中で儀礼に使用された「かわらけ」も京都由来の儀器で、莫大な量が出土しています。また国内各地の窯や中国産の陶磁器も多量にもたらされており、同時代の他地域の在地権力の拠点よりも、卓越した物質文化を誇っています。

3　比爪　ー奥州藤原氏第二の拠点ー

①中核遺跡・・比爪の中心施設は「比爪館」です。比爪館の範囲は東西約300m、南北約200mで、面積は５万㎡以上にも及びます。南面は五郎沼に面し、北・東・西辺は大溝で区画されています。これまで、比爪館は32次にわたる発掘調査がおこなわれ、多量の遺物が出土しています。これまでの調査は小学校敷地である区画内部の北西部に集中しています。この地点では四面庇建物や、井戸跡も多数検出されており、居住用施設の「御所」としての機能が想定されます。

また、比爪館には「大荘厳寺（だいしょうごんじ）」という寺院があったとされています。大荘厳寺は近世初頭に盛岡城下建設に伴い移転し、明治初頭の廃仏毀釈で廃寺になっています。現在、区画内部の南西部には大荘厳寺ゆかりとされる「薬師神社」と「阿弥陀堂」が所在します。そして、その付近は周囲に比べて標高が低くなっており、「金比羅池」という池があったと伝承されています。さらに、その西側には土塁状の高まりが確認されていました。今年度、県立博物館考古部門がこの周辺の微細な地形測量をおこなったところ、平泉の無量光院と同規模の浄土庭園が想定できる地形が浮かびあがりました。西側の土塁状の高まりは、無量光院の金堂が建つ西島に酷似した規模・形状です。これらのことから、区画内部の南西部が大荘厳寺の寺域で、その形態は浄土庭園型式の寺院と推測されます。



比爪館跡（写真：紫波町教育委員会）

区画内部の北東部はほとんど発掘調査がなされていませんが、儀礼・政務の施設の「館」の存在を想定できる広さを有します。このように、「比爪館」は院政期京都の有力者の居館や、平泉の居館と同様の三機能からなる複合施設であることが明らかになってきました。

比爪館の東側には、約１km四方にわたって12世紀の小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡が広がっています。発掘調査では大規模な区画溝と直線的な道路遺構が検出されており、直線道路と大規模な溝で区画される「都市的な場」であることが明らかになりました。このように、小路口Ⅰ・Ⅱ遺跡は比爪館に伴う都市であり、両者の合わせた広がりを「比爪中核部」とすることができます。

②周縁遺跡・・比爪中核部からやや離れた地点にも関連遺跡が所在します。これらも、中核部と密接な関係を有する構成要素と位置付けられます。

下川原Ⅰ・Ⅱ遺跡は比爪館から約２km南東方向に位置します。北上川と平沢川との合流部という川湊に適した立地に位置し川湊としての機能が想定されます。比爪中核部とは平沢川と合流する山吹川によって連結されています。また、火葬施設やかわらけ焼成遺構などが検出され、都市の周縁部の埋葬場所や手工業施設が存在する空間でもありました。

関連講座（聴講無料　当日受付　講堂　各13:30～15:00）

- ３月21日(金・祝)　「御館・大名・国人 －中世成立期の東日本における兵たち－」高橋一樹 氏（武蔵大学教授）
- ３月23日(日)　「俺の平泉 ～比爪を斬る～」　八重樫忠郎 氏（平泉町役場・岩手大学客員准教授）
- ４月13日(日)　「比爪 －もう一つの平泉－」　羽柴直人（当館学芸員）
- ４月27日(日)　「北の経塚」　藤沼邦彦 氏（元弘前大学教授）

伝金鶏山経塚(平泉町)出土経筒、経筒外容器を展示します。（奈良国立博物館蔵　考古資料相互活用促進事業による出品）

栗田Ⅲ遺跡は比爪館から4.8km離れた紫波町西部に所在します。12世紀の遺物が出土しており、居館遺跡と想定されます。遺物の質から住人はそれなりに高位の者であったと考えられ、紫波郡西部の拠点的な居館と位置付けられます。

吾妻鏡には、寺院「高水寺」の記述があります。高水寺は比爪館の3.5km北の北上川縁の丘陵「城山」がその所在地とされます。発掘調査では12世紀の遺物も出土しており、この想定を裏付けています。比爪中核部と近い距離にあることから、その維持、運営に比爪の奥州藤原氏は深く関わっていたと考えられます。

③宗教遺跡・・比爪中核部から視認できる東西の山列には経塚、寺院などが所在します。これらは、比爪の外縁部とも言える位置で、比爪の構成要素と位置付けられる宗教施設です。

西側では、「新山」に新山寺跡、新山経塚、弥勒地経塚が所在します。新山は比爪館の真西に位置し、重要な宗教的仮託がなされていた山と考えられます。

東側では、北東部に山屋館経塚が所在します。また、赤沢地区の薬師堂には12世紀代の「七仏薬師立像」が現在も地域の信仰を保って伝わっています。薬師堂付近には「蓮華廃寺」が所在したとされ、複数の堂宇から構成される大規模な寺院の存在が想定され、比爪との深い関わりが推測されます。

赤沢薬師堂七仏薬師如来立像　正音寺

4 北方への広がり －奥六郡の北へ－

比爪の勢力圏は、比爪周辺に限定されず岩手郡、さらに奥六郡から北方にも広がっていると推測されます。比爪のかわらけは、平泉のものとは異なった作癖がありますが、この「比爪風かわらけ」が北方に分布していることがその根拠となります。また、平泉と比爪の位置関係からも、岩手郡以北が比爪の管轄とするのは自然な解釈です。比爪の北には、あたかも交通路に沿うように、奥州藤原氏時代の遺跡が要所毎に所在します。その交通路は以下の３つに分けられます。

1. 東北縦貫自動車道に沿う道筋
2. 国道4号線に沿う道筋
3. 三陸沿岸部の海路

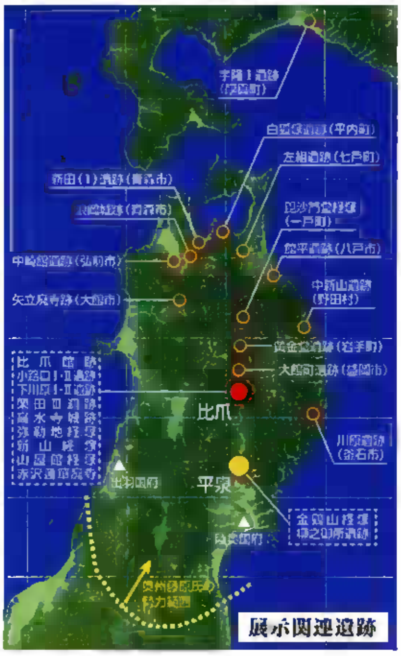
1～3のルートいずれの終点も外ヶ浜（青森湾周辺）ということになります。

3三陸沿岸部のルートは比爪との具体的関係は不明ですが、1、2の陸上交通路は、比爪との関連なしには成り立たない交通路と断定できます。

奥州藤原氏の時代、日本の北東端は「外ヶ浜」とされ、関連遺跡の分布も外ヶ浜までと理解されていました。しかし、さらにその北の北海道にも、奥州藤原氏の影響が及んでいる確実な証拠が見つかりました。北海道太平洋岸の厚真町宇隆Ⅰ遺跡の12世紀の常滑産広口壺です。想定の上では北方交易が取り沙汰される奥州藤原氏ですが、具体的な考古学的な事例は寡少で、非常に注目すべき事例です。

5 比爪その後 －鎌倉時代の紫波－

文治５年（1189）、平泉の奥州藤原氏は滅亡します。比爪の奥州藤原氏も源頼朝に投降し、当主俊衡は比爪の地に残ることを許されますが、その子弟は連行されます。しかし文治合戦において、比爪系の奥州藤原氏は誰一人、討死、刑死し



ていません。このことは、比爪が平泉と最後の段階で袂を別ったことを示しているのかもしれません。

鎌倉時代の紫波郡の様相は不明な点が多い状況です。この時代を埋める資料に、石製の供養碑「板碑」があります。紫波郡内には約50基が存在し、鎌倉時代の紀年銘を有するものも10基以上あります。鎌倉時代、板碑を造立し供養を行い得る権力者が紫波郡内に存在したことを示しています。

6 比爪と平泉

従来、比爪は平泉に従属する勢力との見方が一般的でした。しかし、考古学的な事例を積み重ねた結果、比爪の物質文化、都市構造は平泉と何ら遜色がないことが明らかになりました。このとから、比爪は平泉と同等の格式を持つ、対等の関係であったと理解するのが適切です。

しかし、これは比爪と平泉の対立を示すものではありません。両者の協調関係があったからこそ、奥州藤原氏の繁栄があったのです。

（主任専門学芸員　羽柴直人）